

サブウエイ

佐野 広実

第三話 誰が盗んだのですか

一

神保町 駅半蔵門線の改札を出たところにあるコンビニに入りか
けると、町村光江のがっしりした姿を店内に見つけた。

穂村明美はまず目を疑い、こんなこともあるのだなと口に出さず
うなった。

私服警備員は地下鉄の路線に散らばっているので、まず出くわす
ことはない。そもそも全員の顔と名前を覚えているわけでもないか
ら、出くわしても相手が警備員なのかどうかわからない。

明美と町村は「飲み仲間」でもあるから気づけるが、いままでほ
かの警備員を見かけたことはなかった。珍しいと言えは言える。

明美は素知らぬふりで店内に入り、ぐるりとひと回りしてから町
村が立っている雑誌売り場へそつと近づいた。

後ろに立っても気づかない。熱心に女性漫画を立ち読みしている。

「嫁姑よめしゅうとめのどろどろ」という惹句じやうくがちらりと見えた。

実に町村らしい好みだった。

たいていの漫画雑誌にはテープで封がしてあり、立ち読みできないようになっていいる。町村は堂々と、そのテープを剥はがして読んでいた。

「そういうの、よくないんじゃないですか」

耳元みみもとで囁ささくと、町村のでっぷりした身体がびくりとして、振り返った。

「なんだ、驚かさないだよ」

口ではそう答えたが、顔には驚きとばつの悪さが浮かんでいる。が、それでも雑誌を閉じようともラックに戻そうともしない。

「こんなところでさぼってたら、原口はらぐちさんのこと言えないじゃないですか」

「ちよっと。一緒にしないでよ」

ぐいっと肘ひじでつつかれた。

飲み仲間の原口由紀ゆきは明美と年代代で、私生活ではかなり遊び歩いている。この仕事も会社勤めが嫌になって転職したらしいが、勤務もさぼりがちのようだ。たしかにそれと一緒にだとは思わないが、だからさぼっているわけではないとは言えない。

戸惑とまじっていると、町村が鼻を鳴らした。

「そういうあんただって来てるじゃないのさ」

「わたしは夕飯買いに来ただけですよ」

「へえ」

信じていない口ぶりだった。勤務時間のうち、一時間は休憩を取っていいことになっている。とはいえ、自己裁量にまかされていて、厳密に決められているわけではない。だから、規定以上の時間を休憩にあてている者もいるかもしれない。

一応身分証にGPSはつけられているが、百五十人も的人员を本部がチェックしているとは思えなかった。査察官が警備員と同時に何人か地下鉄内を回っていると聞いたこともあるが、噂うわさ以上のものではなかった。もし本当に査察官がいるとしても、警備員を見つけることは、むずかしいだろう。

警備員も警備員で、考えようによつては地下鉄に乗り続けているだけだから、ずっと「休憩」しているという見方もできるわけだ。どこからどこまでが仕事で、どこからどこまでが休憩か、そのあたりのサービス規定は、いまのところはっきりとしていない。

正式に導入することになったとき、どうするのかは上層部が考えればいいことだ。明美たちは一種のテストケースとして採用されているに過ぎなかった。

ただ、いい加減な勤務をする者が多ければ、導入が決定されたら

き、服務規定が厳しくされるだろう。個人がひとりひとり任務の自覚を持っていれば、規定はそう厳しくはなくなる。

「そういえば、きのう休みだったね、さぼり名人」

原口のことを言っているらしい。

たしかに昨日出勤したとき、ボードの欠勤欄に名前があった。

「でも、きょうは出てるみたいでしたよ。ボードに名前なかったし」

「ま、いてもいなくても仕事に支障はない。とまでは言わないけどね」

「仕事はともかく、飲み会にはぜひとも必要な人とは思いますが」

町村が、ははつと短く笑った。

「そりゃ言えてるか。酒につられてご出勤でとこだね」

「かもしれません」

なんとなく話題をそらされてしまったが、原口と一緒にされたくないというなら、町村はなぜここで時間を潰しているのだろう。

あらためて尋ねかけると、町村は腕時計に目をやってつぶやいた。

「そろそろ五時か」

いつから漫画を読んでいたのか知らないが、悪びれた様子はない。町村も明美と同じ、十二時から勤務のはずだが、まさか十二時からずっとここにいたわけでもないだろう。

十二時から勤務につく遅番のとき、明美はたいいこの時刻に休

憩を取る。少し早めの夕食を取って、午後八時まで勤務を続ける。それから町村、原口、それに奥野おくのと渋谷のセンター街にある「エルニーニョ」で一杯ひっかけるのが習慣になっていた。「酒につられて」原口が出勤したという嫌味は、そういう意味だった。

とはいえ、明美にしても、ほかの三人と飲むのは楽しみだった。

「きょうの担当はどこなの」

町村の質問に、明美は三田線みたと新宿線しんじゆく、それに半蔵門線だと答えた。

車内警備は毎回担当路線が変わる。同じ路線に乗っていると、一般客に明美たちの存在に気づく者がいるかもしれないからだ。あくまで一般客のふりをして乗車し、警備をしなくてはならない。

明美は半蔵門線で押上まで行き、折り返してきたところだった。ちようどいつも休憩を取る時間に神保町駅に到着したので、下車して夕飯を買おうと思ったのだった。このコンビニも何度か利用しているし、神保町駅の事務室で食事することも多かった。

「町村さんは担当、どこなんですか」

しらっと視線をそらし、聞こえなかった素振りを見せた。

「夕飯はなに食べるつもりなの」

「え、まだ決めてないですけど」

「だったら決めなよ」

町村は漫画を閉じてラックに戻すと、弁当の並んでいるコーナーへ先に立っていく。町村も買うつもりなのかと思ったが、明美がサラダパスタを手になると、レジへ向かっていった。朝と夕方の繁忙時には三つのレジを開けるようだが、普段はひとつだけのようだ。

夕刊紙と缶コーヒーを買った中年の男が支払いを終えたところで、入れ替わりに立った町村は、片手を軽く挙げてレジの中にいた女に声をかけた。店内には三人ほど客がいたので、小声だ。

「きょうは大丈夫みたいね」

「いつも悪いわね」

レジの女がこたえつつ、町村の後ろにいた明美に視線を向けてきた。町村と同年代の、五十歳くらいだろうか。コンビニの制服を着て髪の毛をあげているからはつらつとして、おまけに町村と違ってスリムだった。

「同僚なのよ。穂村さんっていうの」

その言葉に、女の目が見開かれた。

「あら、どうぞよろしく」

「こちら元売店のおばちゃん」

そっけない町村の口調に女は苦笑した。

「なによ。ちゃんと紹介しなさいよ」

そう言ってから、今井ゆかりと名乗った。

「昔はあちこちにあった売店で働いていたんですけど、だんだん売店もなくなってきちゃって」

それでコンビニに転職したという。もともと地下鉄内の売店は東京メトロの関連会社が運営していたが、不景気で整理されてしまった。町村の夫が地下鉄乗務員という関係で、以前から顔なじみらしい。

明美が小さい頃は地下鉄の駅には売店がいくつもあったものだ。亡くなった父が運転士だったから、あちこちの売店でお菓子を買ったもらった記憶がある。

「あら、お父さん地下鉄勤務だったんですか」

今井は嬉しそうに尋ねてきた。

「ええ。どこかでお会いしていたかも」

「なんだか、みんな身内みたいね」

町村と目を見合わせて、今井は笑った。

「あたしがいないとき、この人に頼むこともあるかもしれないから

ね」

明美を指さして、町村が告げた。

「どういうことですか」

訊きかえすと、町村が声をひそめた。

「万引きよ」

売店のころはこぢんまりしていたからあまり万引きはなかったらしいが、敷地しきちが広く、商品も多くなったせいで、万引きも増えたという。

何台か防犯カメラは設置されているが、営業中にモニターばかり見ているわけにはいかない。そのため、ときたま町村が見回りをしているらしかった。

「あたしら、警備員だから」

当然のように町村は胸を張った。

たしかに地下鉄構内にあるコンビニであれば、警備の対象と言えなくはない。もともと、明美たちは列車内の警備が主なのであって、構内警備は別の話だ。

ただ、事情を聞いて、町村がコンビニにいた理由は納得できた。

自分の仕事の範囲を超えているとは思いますが、さぼっているわけではないし、一概いちがいに悪いとは言えないだろう。万引きが多発する時間帯というのは駅によって違うのだろうが、最近学校帰りの中高生が大人数でやってきたあと、品物がなくなっていることが多いと今井は説明した。防犯カメラの位置も把握しているらしく、仲間がそれを遮おかくっているあいだに品物を盗んでいく。しかもスリル半分に菓子などを盗っていくのではなく、高額な充電器やゲームが中身だけなくなっているという。

「で、毎日ってわけにはいかないけど、三時から五時あたりに見張ってたわけよ」

「そんなに多いんですか」

明美が今井ゆかりに尋ねると、悲しそうにうなずいた。

「その時間帯は、レジがひとつでしょ。支払いに気を取られていると、ちよっと」

いわゆるワンオペだから、目が行き届かないらしい。昔勤めていた売店も、もともとワンオペだったが、守備範囲は狭かった。

「ま、通りかかったら覗いてあげてよ」

無理やり「見張り」に引き込むつもりはないらしく、町村はそう言って明美の肩を叩いた。

「わかりました」

明美はひとまずそう答えておいた。

もちろんなれ合いで引き受けるつもりはないが、決められた任務だけやっていれればいいという考えもなかった。

スポーツドリンクを手にした男子学生がふたり後ろに立ったのに気づき、明美は手にしたサラダパスタを今井に差し出し、キャッシュレスで決済した。

「ありがとうございました」

今井の声が、なにごとくなかったように明美たちを送り出した。

駅構内の売店は数が減ってしまい、いまでは小規模のコンビニに取って代わられている。

コンビニ以外にも、改札の外まで考えれば、地下鉄にたどり着く地下通路には、かえって店が増えたともいえた。一坪ほどのスペースにアクセサリーを売ったりする店や、占いをやったりする店がある。少し大きい通路になると手作りの菓子販売、植木や花を扱っている店、書店まである。地下通路も東京メトロの所有のはずだから、そこを賃貸することで収入が発生するわけだ。

昔ながらの売店を常設するよりも効率がいいのかもしれなかった。とはいえ、昔あった売店が懐かしいと明美は思う。

物心ついたころにはすでに数が減り始めていて、つい昨日まで開いていた売店にシャッターが下りて、「閉店挨拶」の貼り紙がしてあったりするのをよく目にしたような記憶もある。

狭いスペースにチョコやガムやキャラメルなどがぎっしり詰まっていたイメージがあるのだ。むろん、新聞や雑誌、酒、たばこ、文房具、のし袋、切手といったものも売っていたはずだが、幼い明美にとってはお菓子のイメージが強い。

同時に父の思い出に、それはつながっている。

父の智彦ともしひこは銀座線の運転士だった。

非番の日に池袋いけぶくろにあった実家から、父と出かけると、いつも地下鉄に乗せられた。途中の駅で売店に寄り、そこで好きなお菓子を買ってくれる。目的地があった訳ではなく、地下鉄に乗ることが目的のお出かけだった。毎回違う路線に乗り、乗っているだけで父は楽しそうだったのを覚えている。もちろんそのとき制服は着ていない。

根っから電車が好きだったのだろう。実家にはいまでもミニチュア模型や鉄道雑誌がどっさり物置にしまい込まれているはずだ。

だが、ただ単に地下鉄に乗っているばかりではなかった。もちろん明美の前では単純に楽しそうにしていたが、それだけではなく、乗客の様子をしっかりと見ていたようだった。

この仕事についてからふいに思い出したのだが、あるとき、サラリーマンらしき二人の男が胸倉むなぐらをつかみ合っただけのしっている場面に遭遇そうぐうした。

明美が五歳くらいときだったと思う。

どの路線だったかは思い出せないが、走行する車両の中のことだった。肩がぶつかったとか、足を踏んだとかいう他愛のないことが原因だったのだろうが、どちらも引くに引けないらしく、互いに

睨み合って短い怒声をあげていた。

それは幼い明美にとって恐怖だった。ふだんの車内とはあきらかに違っていたし、周囲にいた乗客たちも素知らぬふりをしつつ警戒感を漂わせていた。

「ここに座っていなさい」

並んで座席についていた父が、明美の頭を撫でて、そう言ったのを思い出した。運転士をしていたからか、いつも言葉遣いは丁寧で、低く落ち着いた声だった。

そのとき、自分がどうしたのか覚えていないが、たぶんおとなしく言うことをきいて座席についていたのだろう。セーターにストラック姿の父が揉めているふたりの方に立って歩いていく後姿が記憶にあるのだから、間違いはない。

車内は数人が立っているくらいで、見通しは悪くなかった。車両はかなり揺れていたようだが、父は職業柄慣れているから、すいすいと歩いていった。

ふたりのところへ行った父がなにを口にしたのかわからない。が、ひとことふたこと言葉を交わしただけで、ふたりの男はそれぞれ申し訳なさそうに左右にすつとわかれた。

ちょうど駅に到着し、ひとりが父と喧嘩相手に頭を下げて降りて行った。もうひとりの男も深々と一礼し、隣の車両にそそくさと移

っていった。

ふたたび列車は走り出し、父がいつものにこやかな表情で戻ってくるのが見えた。

薄ぼんやりした記憶が、この仕事についてから蘇よみがえってきたのは当然だったかもしれない。車内のトラブルを、父はいとも簡単に解決し、何事もなかったかのように戻ってきたのだ。まるで明美がこの仕事に就くことがそのときから決まっていたかのようにさえ感じた。

そういうのを「後付け」っていうのよ。

町村なら、そう言って笑ったかもしれない。

むろん後付けだろう。だとしても、あるとき父がどうやって、揉めていたふたりをあれほど短時間で和解させることができたのか、知りたかった。

もし同じ場面に出くわしたら、自分ならどうするか、半年近くもこの仕事をしていながら、答えは出ていない。じっさい、いままで何度か喧嘩している男たちを止めに入ったこともあったが、なんとかこなしてきたような具合だった。

喧嘩にかぎらず、あらゆるトラブルに対しては、そのときの状況によって臨機応変に対処すべきだし、トラブルを起こしている相手がどんな人間なのかを一瞬で見抜き、判断しなくてはならない。

研修では、そう言われたただだった。具体例はいくつか示され、対応の仕方も聞いた。だが、具体例は人の数だけある。いや、人と人が揉めているなら、組み合わせはそれ以上だ。

それを全部示せというのは無理な話で、結局現場で警備員が毎回対応を考える必要があった。それをこなしていくことで、徐々に対応を身につけていくしかないのだろう。

父もたぶん運転士として長年勤務していたからこそ、とっさに対応ができるまでになっていたに違いない。

コンビニを出て町村と別れたあと、駅の事務室で食事をしながら、明美はそんなことを考え続けていた。

残りの勤務を終え、渋谷駅にある詰所つめしょで点呼を終えると、明美の足は「エルニーニョ」へ向かった。

町村と会ったこと、万引き警備をしていたことは、明美から話題にはしないと決めていた。こういうことはどこから漏れるかわからない。漏れた結果、町村が「責を受けるようなことになれば、申し訳なかった。決して悪いことをしているわけではないのだ。」

しかし、その思いは杞憂きゆうだった。それどころではなかったのだ。

「エルニーニョ」に着いてみると、町村たち三人はずでに来ていて、

いつものボックス席に顔をそろえていた。そこへ進みかけたとき、まず目に入ってきたのが、原口由紀の泣き顔だった。

何人目かの「カレシ」に逃げられ、ベソをかいていたのだ。

「ちよっと聞いてよ」

明美を見つけた原口は大声で呼びつけ、出会いから逃げられるまでの話を、ウイスキーのロックと何本かの煙草とともに聞かされた。

ろれつの怪しくなった口調で説明したところによれば、二か月前に六本木のクラブで知り合った商社マンで、ここ十日ばかりは原口の部屋に居ついていたらしい。ところがその相手が三日前出て行ってしまった。原口が遅番で出勤したときには笑顔で送り出してくれたが、帰ってみると男の荷物はなくなっていた。

奥野と町村が平然として聞き流していたのをみれば、店に到着した順に同じ話を聞かされたのだろう。

「見る目がないんだって、あんたは」

ひととおり明美に話し終えたのを見計らって、町村が慰めまじりに説教めかした。

「だって結婚するって約束したのに」

泣き声で叫んだ原口に、明美はぎよっとした。たったそれだけで相手を信じたのだとしたら、あきれるしかない。

「手慣れてるのよ。常習犯かもしれないわね」

奥野の冷静な返答に、明美も同意だった。こういうのは詐欺さぎとい
うべきなのかどうかかわからないが、繰り返しやっている気配がある。
そもそも商社マンというのも怪しい。

「警察に相談した方がいいかもしれませんね」

「あのさあ」

つぶやいた明美に、怒りが向けられた。

「なにも盗られたわけじゃないんだからさ。好きになった男を犯罪
者呼ばわりしないでよ」

戸惑っていると、町村が割って入った。

「わかったわかった。盗られたのはあんたのハートだけだよ。い
いから飲みな。また新しいの見つければいいからさ」

俗にいう絡み酒というやつだというのは、あとで町村から教えて
もらった。ともかくこの場は原口を酔い潰してしまうのが最善の解
決策と判断されたようで、奥野がカウンターに立っていき、テキー
ラの瓶をマスターからもらって戻ってきた。

ほどなく意識のなくなった原口をタクシーに押し込め、お開きに
なったのは、言うまでもない。

ロッカーの鍵。

言われるまで、まったく失念していた。

大崎署おおさきの中窪なかくぼ由起子ゆきこから携帯にかかってきたのは、翌日の昼過ぎのことだった。

「きょうは非番だと聞きましたので」

そう前置きして、中窪は明美のかつての恋人だった場的場要まどば一の事について訊きたいことがあると告げた。

二年前のクリスマススイブの晩、明美と新宿で待ち合わせていた要一は、なぜか五反田駅ごたんだで倒れているのを発見された。防犯カメラで足跡をたどった結果、地下鉄麻布十番駅あざぶじゅうばんの構内でトラブルがあったと判明した。要一は大柄な男に頭を殴られて倒れ、そこからふらつく足で五反田駅に辿り着いたことになる。死因は男に殴られて倒れたとき頭を強く打ったためだとされた。犯人はいまだに見つかっていない。

中窪は新しく継続捜査を担当することになった女性の刑事だった。捜査資料を読み返していて、気になったことがあるという。

「場的場要一さんの所持品の中に、地下鉄茅場町駅かやばちようのロッカーの鍵

がありましたね」

そう尋ねられてやっと思い出した。ベッドの縁に腰をおろし、枕元に置いてある要一の写真に目をやりつつ、こたえた。

「たしかロッカーには何もなかったと聞きましたけれど」

当時、所持品として返された両親がロッカーを開けに行ったが、何もなかったと電話をくれたはずだった。

クリスマスだったから、明美さんへのプレゼントでも入っているのかと思ったけれど。

神戸から出てきた母親は、そう言って声を詰まらせていた。

そのとき、要一の時計を形見としてもらいたいと頼み、こころよく応じてくれたのだった。それが今、明美が腕につけているものだ。

「そのようですね」

中窪の声が、明美を引き戻した。

「署でも中身が気になって、ご両親に何が入っていたのか訊いていきます。資料にも、何もなかったと記されています」

「間違いないと思います」

「なぜそんなことをしたんでしょう」

「どういうことですか」

「ロッカーに荷物を入れずに鍵をかけたことです」

すつと息をひそめる気配があった。

「さあ」

そもそもロッカーの鍵は金を入れて扉を閉じてロックしないと抜き取れない。たしかに何も入れずに鍵をかけたとか思えなかった。

「ロッカーの鍵は、担当の刑事さんからは、単なる所持品として返されていたはずですよ」

「変なことを気にすると思われるかもしれませんが、何か引つかかるんです」

「わたしに訊かれても、そこまでは」

「ロッカーに物を入れないで鍵をかけるのは、どういう場合でしょう」

唐突に尋ねられ、明美は返答に困った。額の中にある要一に視線をやって救いを求めると、口がひとりでに開いていた。

「普通ロッカーを利用するのは、荷物が持ち運びに邪魔だからですよね」

「そうですね」

「預ける荷物がなければ、ロッカーを利用はしないし、誰かに物を渡すために利用するなら、そもそも荷物を中に入れておいてからロックして、その鍵を相手に渡すはずだし」

考えつつひとりごとのようにつぶやくと、中窪があとを続けた。

「こうも考えられませんか。最初はロッカーに荷物を入れ、鍵を誰

かに渡し、荷物を持って行ってもらったつもりだった。けれど、荷物を渡す気がなくなり、荷物が入っているように思わせて鍵だけを渡そうとしていた」

たしかに、そういうこともありそうだった。

いったん納得したが、中淫が何かしら予断をもって尋ねているらしいことに気づいた。

「それは、どういう意味ですか」

わずかに間があった。

「防犯カメラの映像も見たのですが、覚えていらつしやいますか」
忘れるはずもなかった。あれが要一の生きていた最後の姿なのだ。

「それが、なにか」

「画面の下から男が走ってきて、ちやうどカメラのところでの場さんに追いつかれています。そして的場さんと男が揉み合い、男が的場さんを殴り、的場さんはそのまま通路に倒れて後頭部を打つていきます。その隙に男は画面の奥に走って行ってしまった」

「そう、そうです」

モノクロの防犯カメラは、すぐに起き上がった要一が、逃げ去った男をふらつく足で追っていく姿を映し出していた。

「こういう推測もできると思っています。二人は肩がぶつかったとかいうくだらない理由で揉めたわけではなく、男は的場さんが持って

いた何かを奪って逃げたのではないか。それを取り戻そうとしての場さんは男を追いかけ、反対に殴られてしまった」

「そうだとして、それがロッカーとどういう関係があるんですか」

「わかりません。いまのところはそれだけなんです。が、捜査資料に記されていることが事実かどうか、それをたしかめたくて」

丁重な礼を述べて、通話が切れた。

何かしら疑いの目で要一のことを見ている気がした。

携帯をベッドに放り出し、あらためて額の中の要一に視線を向けた。奥多摩へふたりでハイキングに行ったときのものだ。要一はこちらに向かつて微笑んでいる。首からタオルをかけ、岩に腰を下ろしている姿は、なんの屈託もない。

クリスマスプレゼント。

前もって買っておいたプレゼントを茅場町のロッカーに置いておき、それを持って新宿に向かおうとしていたのではないか。高田馬場まで行き、そこから東西線に乗れば二十分足らずで行ける。

そういう考え方もできなくはない。実際クリスマスプレゼントは遺品の中にはなかった。

だが、それならなぜロッカーに物も入れずに鍵をかけたのか、その説明がつかない。

いったいどうということなの。

明美は写真に問いかけたが、返事があるはずもなかった。

その日は夜になって、もう一本電話があった。

「たまには連絡しなさいよ、もう」

出たとたん、母にそう言われた。

「なにかあったの」

「なにかって。なにかないと電話しちやいけないっていうの」

「そういうわけじゃないけど」

「相変わらずよね、そういうところ」

「似たのよ、母さんに」

「いいえ、そこは父さんに似たのよ。わたしはそんなに無愛想ぶあいそじゃないもの」

「そうかな」

「そうよ」

「で、どうかしたの」

「どうかしたじゃなくて。もうすぐ命日だから」

八月十二日は、父の命日だ。忘れるはずもない。もったも、まだひと月以上ある。

「今年は十七回忌だから少しお客さんを呼ぼうと思って」

「ああ、そうか。もう十七回忌か」

「で、会場に予約を入れたいから大体の人数を確かめたいと思って」
「もちろん、行くわよ」

「当たり前でしょ。そうじゃなくて、リストを作ったんだけど、漏れがないか確認してほしいのよ」

「そんなに大げさにしなくても」

「そうはいかないわよ」

「母さんの作ったリストでいいわよ」

「そんなに忙しいの、その仕事」

「まあ、いろいろとね」

「三木みきさんからこないだ電話いただいてね、しっかりやっているって褒めてたわよ」

「そう」

三木は明美の上司でもあるが、それ以前に父とは学生時代の友人だった。社会人になってからは家を行き来するほどでもなかったらしいが、学生時代は毎日のように行動を共にしていたらしい。葬儀のあとも、父の法事のたびに顔を見せていた。自然と顔と名前は憶えていたが、明美が警備員に志望したときには、その三木が上司になるとは思ってもみなかった。もともと警視庁に勤めていた三木が、東京メトロに転職していたことすら知らなかったのだ。

もつとも、母親は知っていたかもしれない。

明美が警備員の採用試験を受けると口にしたとき、ひそかに裏で手を回していた可能性もあった。

母の貴代たかよは、父が亡くなってからというものの張り合いをなくした時期はあったが、女手ひとつで明美を育て上げてくれた。

だが、的場要一と付き合いだしてからというもの、ことあるごとに明美だけが頼りだと弱気なことを口にするようになった。二人きりの家族なんだからというのが口癖で、要一に明美を奪われるのではないかという心細さがあったようだ。

要一の事件があつてからは、反対に明美を励ほげますようにもなり、どちらにしても明美を自分の思うようにしたいという思惑すが透すけて見えた。

そこで警備員になるのをきっかけにして家を出たのだった。

むろん、母はそういった内面をあからさまにすることはない。表面上はさばさばした母親を演じているが、長年生活していた明美には、押し隠している思いが感じられるのだ。

もつとも、すでに半年近く離れているせいか、母の態度にも少し変化が出てきたようだった。もう明美には頼らなくても平気という気配すらある。一人暮らしを満喫まんきつしているといったところか。

「当日は三木さんもいらっしやるって」

「そう」

どこかうきうきした口調だった。

「まさか、連絡取ってるの」

「誰と」

「統括官と」

わざとよそよそしく肩書で尋ねた。母の苦笑が聞こえた。

「そこまで明美のこと監視したりしないわよ」

「あんまり変なこと言わないでよ」

「変なことって、なによ」

「わたしのプライベートなことよ」

「そんなの知るわけないでしょ。どこのマンションにいるのかだつて教えないんだから」

明美は押し黙った。母にやたらと来られるのは迷惑だったから電話番号だけ教えて、マンションの住所は黙っていた。しかし、三木に訊けば、あっさりと知ることができる。

「聞いたんでしょ」

「なにをよ」

「住所」

隠し事がばれたときのるように、照れた笑いが起きた。

「聞いたからこそ、リストを郵送していいかどうか、訊きたかったのよ」

要するにそれが電話してきた理由らしい。回りくどいところは相変わらずだった。

なかばあきらめ、送ってくれていいと答えて電話を切った。

四

それから十日ほどのあいだ、神保町を通っている三線、つまり新宿線、半蔵門線、三田線の担当にはならず、今井ゆかりの働いているコンビニを覗くことはなかった。

ただ、ほかの駅にもいくつかあるコンビニ内の様子を以前より注意するようにはなった。コンビニばかりでなく、地下通路にある小さな個人経営の店にもひととおり目を向ける。

なにか不都合なことがないか、それとなく訊いてみたりもした。車内警備とは別だとしても、困っていることがあるなら力になりたいたいと思ったのだ。

人の歩くところに店の品物を陳列して迷惑だと怒鳴られた。並べていた手作りのアクセサリを持ち逃げされた。トイレに行きたいが、遠いし留守にできない。売上金を保管できる場所がない。もう少し通路にも冷暖房を効かせてほしい。

聞いてみれば、いろいろとあるものだった。

もちろん、明美にできることは限られている。だが、せめて愚痴ぐちを聞くくらいのはしてもいいだろう。

ともに地下鉄構内で仕事をしているという意味では、立場は同じなのだ。

それは一般乗客にも言えた。地下鉄を利用しているということは、そのあいだだけは立場は同じだ。困ったことがあれば力を貸す。困っていれば、周囲の人に助けを求める。

当然といえば当然のことだ。べつに正義漢ぶれというのではない。逆に周囲に気をつかってびくびくしているというでもない。

研修のとき「公共の場として地下鉄を考えること」という話を、大学の講師がしたのを思い出した。そのときはぴんとこなかったが、実際に仕事をしているうちに、もしかすると私服警備員とは「地下鉄業務を安全に運営する補助的な仕事」だけではないものもあるような気がしだしていた。

たしかに極端な暴力事件や犯罪を抑制するためであるのは事実だが、そんなことはめったに起きないともいえる。ましてや、その場に遭遇することなど稀まれだろう。現行犯の場合、私人逮捕ができるとはいえ、あくまで犯罪抑制のための警備なのだ。

たしかに車内では痴漢ちかんやスリに注意はしている。ただ、それを発見して捕まえるのが任務ではない。痴漢やスリをしようとする者が

いれば、それを抑制するのが任務だ。

それはコンビニの万引きを摘発するのではなく、万引きしないように抑制することでも同じだろう。

その日は遅番で、浅草線、日比谷線、半蔵門線の担当だった。

原口は悪酔いした日以来、仕事上がりの「飲み会」には顔を出していない。明美たちに酒の肴にされたせいで機嫌をそこねたわけではないだろうが、かなり落ち込んでいるのは確かなようだった。

母からは手書きのコピーで法事招待客のリストが送られてきて、親戚五人と生前父がかかわりのあった地下鉄関連の者、親しかった学生時代の友人が十人記されていた。三木統括官の名前も友人の欄にあった。

リストを眺めていて、生前の父と一緒に地下鉄に乗っているとき、同僚の職員に声をかけられ、よく頭を撫でられたことがあったのを思い出した。不思議と誰もが頭を撫でるのだ。

すでに二十年以上前だから、退職している者も多いに違いない。リストの中に頭を撫でてくれた人がいるのかどうかわからなかったが、昔は今ほど殺伐としていなかった気がして、同じ地下鉄であっても、運営する者も利用する者も、少しずつ変わっていくのだという実感が起きた。

ざっと目をやって漏れはないと思えたので、留守電にこれでもいいと思うと答えておいた。

じつさいのところ、明美の頭を占めているのは要一の一件で、法事も原口も、とりあえず二の次だったのだ。

中窪が要一になにかしらの疑いを持っているのではないかという思いが、なかなか拭えずにいた。

勤務で列車に揺られていると、周囲に注意を払っていても、ついついぼんやりと考え込んでいたりする。それが嫌で、がらがらの車両に乗っていても、座らずに立ち続けたりしていた。少しでも要一のことを考えないようにと思っただったが、そう思えば思うほど、かえって気になってきていた。

渋谷から浅草線で浅草へ。そこから引き返して上野で日比谷線に乗り換える。押上と中目黒を二往復し、中目黒から半蔵門線に乗り換えて二往復した。

地下鉄の大半は当然のことながら地下を走る。外の風景といえは点々と灯る蛍光灯ばかりだ。それがリズムをきざむように後ろへ流れていく。そこに自分の顔がぼんやりと浮かんでいるのを見ているばかりだった。

この十日ほど、中窪から聞かされた一件のせいで、仕事に集中できなかつた。コンビニや通路の店などを見て回っていたのも、なん

とか集中を取り戻すきっかけを作ろうとしていたからだ。だが、いまだに仕事の「勘」が戻ってこない。

いまのままではよくないと軽く頭を振ってドア窓に映る自分を睨みつけた時、駅プレートが目の前で止まった。

神保町。

それを目にしたとたん、反射的に明美は下車していた。

腕時計は午後四時近くになっている。気晴らしといえは聞こえはいいが、要のことを頭から追い払えるかもしれないという思いで、改札を抜け、今井ゆかりのいるコンビニへと足を向けていた。

時間的に下校時刻の中高生が構内をかなり行き来していた。

少し早いが夕食を買っていけばいいと思いつつ店のドアにさしかかって、思わず立ち止まってしまった。

この前町村がいたのと同じ場所に、今度は奥野が立っていた。

しかも町村同様に雑誌の立ち読みをしている。もっとも、手にしていたのはテープの封がされていない週刊誌だ。

眼鏡をかけた視線は開いた雑誌に向けられていたが、ふいに右手を顔の横に上げると、何度か軽く振ってみせた。こっちに来いと言っているのだ。

明美は大きくひと呼吸してから、店の中に入っていった。

まっすぐ雑誌コーナーへ行き、横に並んでファッション誌を手

取った。奥野の開いている雑誌の記事に目を走らせると「国際政治学者の上から目線」というリードが見えた。

「なんか、偶然ですね」

わざとらしく聞こえたらしく、奥野の眼鏡がちらりと向けられた。

「そんなわけではないでしょ」

小声で軽くなされてしまった。

「じゃ、奥野さんも町村さんに話を聞いてたんですか」

「そうじゃなければ、ここにいるはずないでしょう」

素知らぬ振りでページをめくった。

たしかにそうだ。たまたま町村のいた場所にいると考える方が不自然というものだ。

「ときどき、覗くようにしてるの。ここだけじゃなくて、ほかのお店も」

「そうだったんですか。わたし、ついこの間まで全然知らなくて」

「町村さんは無理強いしなかったでしょ」

「ええ」

たしかに万引きの監視をしているとは打ち明けてくれたが、明美にもやってくれとは言わなかった。

「うまいのよね、そのあたり。勤務と関係ない仕事だし、正面きつてやってくれて頼まれたらまだ断りやすいけど、なにも言われな

いとかえって気になるわけ」

「なるほど」

町村の顔が思わず浮かんた。一見大雑把おおざっぱで太っ腹な様子だが、かなり繊細なところもあるのだ。悪く言えば計算高いというべきか。

ただ、そういう思惑があるかないかは別として、奥野が進んでコンビニを見回っていることが、明美には安心感を与えた。

勤務内容に明確に含まれていなくとも、自分にできるなら手助けをする。

それを奥野が認めていて、同時に自分の判断と一致していたことが嬉しかった。

「ちよつと挨拶してきます」

明美は雑誌をラックに戻し、レジへ向かった。

店内には客が五人ほどいたが、会社員風の男女ばかりだった。

「あら、いらつしやい」

今井ゆかりはレジの中から会釈してきた。だが、そのあとは素知らぬふりになる。

そこで迂闊うかつだったことに気づいた。

万引きを監視するなら、店員と顔なじみだと知られるのはまずい。スーパーにいる私服警備員は、一般の買い物客の振りをして店内を回っていると聞いた。

この前は町村が今井ゆかりと明美を引き合わせるためだったから、支障のないかぎりで少し会話を交わしたというにすぎない。

明美は会釈を返すだけで、そそくさと雑誌のコーナーに戻った。

奥野ともまったく別々の客のように振舞った方がいいだろう。奥野が雑誌から目を離さずにやりとりしていたのは、そういうことだったらしい。音量もいつもより抑えていた。

さつきより少し距離を置いてラックの雑誌に手を伸ばしかけたとき、自動ドアが開いて男子生徒の一団が入ってきた。

目で追うと、全部で六人だった。

有名私立大学付属の高校なのは、シャツについているエンブレムでわかった。バスケットボールをひとりが持っていて、どうやら部活仲間らしいが、時間的にさぼって遊び歩いているといった様子だ。全員が、いわゆるシャツの裾出し腰パンで、制服の着崩し具合から、ほうじやくぶじん傍若無人な態度が感じられる。

急に店内が荒んだすさ気配に満ちた。

生徒たちは店内に散り、半分は飲料コーナーへ、あとの半分はスナック菓子コーナーへわかれた。

飲料コーナーの三人はふざけあいながら飲料を選んでいる。スナック菓子コーナーに回った三人にも声をかけ、かなり店内が騒がしくなった。

スナック菓子のコーナーは、雑誌コーナーと向き合う場所にあつたので、三人の高校生が明美たちの背後に陣取った。そこにいるのは邪魔だといったげに背中に身体をぶつけてくる。

それを合図にしたように、奥野が雑誌をラックに戻し、その場を離れた。足はレジの方に向かわせつつ、スナック菓子の連中に注意を向けている。

明美は素早く理解した。

この前今井ゆかりが言っていた集団というのが、いま入ってきた生徒たちなのだろう。

棚はレジから見えて縦に二列並んでいて、奥野はレジ側からスナック菓子の選んでいる生徒たちの様子をうかがっている。

明美も雑誌コーナーを離れ、店のいちばん奥に移動し、そこから様子をうかがう。

問題なのはスナック菓子コーナーの隣だ。

飲料を万引きするはずもない。飲料コーナーは扉を開いて取り出す手間がかかるし、飲料なら高くても数百円だ。狙いはスナック菓子の横に並んでいる電気製品。この前、今井ゆかりが言っていたように目的は高額な携帯などの付属品に違いない。

大声で会話しながら飲料を選び、扉を何度も開け閉めし、レジの注意を向けているうちに、一方の仲間たちが高価な電気製品をバツ

グに突っ込むというわけだ。

スナック菓子のコーナーにいる三人のうち、二人がしゃがみ、バスケットボールを腰に抱えているひとりが立っている。

三人は菓子を選ぶ振りをしつつ、少しずつ電気製品側へと移動していく。立っているのが防犯カメラを遮る役らしい。

かがんでいるひとりが充電器を手にしたのが見えた。

だが、そのまま充電器をバッグには入れなかった。プラスチック包装を手早く引き剥がし、中身だけをかがんでいるもうひとりに手渡す。すると、立ってバスケットボールを抱えていた腰パンのポケットにするりと入れた。ボールも万引きの小道具らしかった。立っている位置から見えないように、ボールで隠し、その下からポケットへ品物を入れさせるわけだ。

手慣れた印象があるから、常習だろう。ほかの店でもやっている可能性はあった。

「おい、決まったかよ」

ポケットに充電器を入れた生徒が飲料コーナーにいる仲間大声で尋ねた。おうと返事がある。「仕事」が終わった合図らしい。生徒たちは飲料とスナック菓子を手にいっせいにレジへ進みだした。

確認したかと尋ねるように、棚の向こう端にいた奥野が視線を向けてきた。明美はうなずいた。

生徒たちはレジに向かったが、バスケットボールを抱えた生徒と
もうひとりは何も買わず、先に行ってるぞと仲間に告げて店を出て
いく。

万引き犯を拘束するのこうそくは、店を一步出たところだというのが鉄則
だ。

明美と奥野も店のドアに、素早く回った。

五

「ちょっといいですか」

奥野がふたりの後ろ姿に声をかけた。

落ち合う場所を決めているのか、店を出てもそのまま仲間を待た
ずに歩き去ろうとしていたふたりが立ち止まり、ゆっくりと振り返
った。どちらもバスケットボールをやっているだけにかなり背が高
い。

「なんすか」

ポケットに充電器が入っている生徒が、貧乏ゆすりをしつつ一歩
前に出た。

「支払い済ませていない品物、ありますよね」

明美が尋ねると、ツーブロックにした頭をわずかにかしげ、口元

に冷ややかな笑いを浮かべた。そして、すつと後ろにいる仲間に顔を向け、目を合わせる。

ふたり同時に肩をゆすって低く笑い声を立てた。

「意味わかんないんですけど」

顔を戻し、明美と奥野へ顎あごを突き出した。

「はっきり確認しています。お話聞かせてもらいます」

「は、あんたら警察かよ」

「違います。地下鉄の警備員です」

明美が答えたとき、仲間が清算を終えて店から出てきた。

「なによ、どうかした」

リーダー格らしき生徒がペットボトルを手に威嚇いかくするように近づく。

奥野がその行く手に立った。

「コンビニで支払いを済ませていないようなので、事情をお聞きしています」

「え、そんなことねえよな」

奥野を飛び越えて、バスケットボールの生徒に尋ねる。

「エンザイツすよ」

当然のごとくこたえる。

「おい、おれら疑われてるみたいだぜ」

背後にいた仲間に、リーダーが声をあげた。

いつでも動けるように身構えていた明美の目に、店の中から今井ゆかりが警察に連絡したということを手振り手振りできかんに知らせている姿が入ってきた。手には万引きした品物の包装バックを持つていた。

「いま警察が来ます。それまで待つてください」

「なんで待たなきゃいけないのよ。ちゃんと金払ってるじゃん。だいいち身体検査とかして、なんも出てこなかったら、あんたたちどうしてくれるの」

「どう、とは」

奥野の問いに、リーダー格が鼻を鳴らす。

「おれら、名誉傷めいよつけられたことになんないかな。反対にあんたらが訴えられるんじゃないね」

「どうかしら」

「将来のある若者に疑いかけることになると思うけど」

「だったら、なんだというんですか」

「これ見えないの」

リーダー格は、シャツポケットについているエンブレムを指さした。

「それが、どうしたんですか」

「ここ、けっこう偏差値高いの。将来、人の上に立つの。そういう若者に疑いかけることになるの。わかる」

明美はまずいと思った。奥野が手を出すのではないかと警戒した。ひと月ほど前に女子高生を平手打ちして停職一週間をくらったばかりだった。

人を人とも思わず、自分だけは特別だと思っているような者に、奥野は容赦がない。

だが、奥野は踏みとどまったようだ。怒りを抑えた調子で、きっぱりこたえた。

「どっちが正しいか、防犯カメラを見て警察が判断してくれると思います」

「あ、そ。でも、おれたちは何もしてない。やったとしても、あいつがやっただけでしょ」

防犯カメラから見えないようにやっている自信があるのか、リーダー格は、また奥野と明美を飛び越して、バスケットボールを手にしている生徒に睨みを向けた。

バスケットボールを手にしていた生徒の表情がわずかにゆがんだ。「あいつがやっただけ」という言葉はリーダー格から「失敗したら切り捨てるだけだ」と言われたに等しいようだ。だが、リーダーには逆らえないらしく、怯えた目をうろつかせた。

隙を見てポケットに入れた品物を捨てるのではないか。

明美は、バスケットボールを手にした生徒の一挙手一投足に注意を払った。

「じゃ、おれら行くから」

リーダー格の生徒は、二、三步用心深くあとずさりしたあと、くると背を向け、背後にいた仲間とともに歩き出した。

そのとき、半蔵門線がホームに滑り込んできて、すぐ横にある改札から大量の乗客が足早に明美たちの横を通り抜けていった。

一瞬そちらに気を取られたとたん、明美の顔面に平手で叩かれたような痛みが走った。

持っていたバスケットボールを投げつけ、ふたりの生徒はリーダーたちとは反対方向に走り出していた。

素早く奥野が追いかけてよとするのを、明美はとどめた。

「わたしが行きます」

奥野に行かせれば、まずいことになる、とつさに判断していた。すでにふたりの生徒は三十メートルほど先の階段を駆け上がるうとしていた。だが、明美には追いつく自信があった。日頃ジョギングをしているから、学生時代からやっているフルマラソンの力は落ちていない。

階段の途中に黒い充電器が落ちている。それを拾い上げてさらに

二人を追った。

三田線と新宿線への連絡通路が分かれるあたりで追いつき、二手にわかれたうち、バスケットボールを投げつけた方を追う。部活で練習をすっかりしていれば、行き来する一般客をすり抜けて走っていくのはたやすいことだろう。

だが、部活をさぼっていたつけがここへ来て出たようだ。

まともに男性客にぶつかり、跳ね返されて足元がふらつき、そのまま倒れ込んだ。追いついた明美は息を整えつつ少年の横に立つと、手にしていた充電器を突き出した。

「事情を、聞かせてもらえますか」

足をひねったらしく、倒れたままの格好で低くうめき、悔しそうな視線が明美を見上げてきた。

もはや抵抗するつもりはないようだった。

六

嚴重注意と一週間の減給。

それが奥野と明美に言い渡された処分だった。

万引きをしたと疑われる少年を追跡した結果、地下鉄構内を移動する乗客をいたずらに危険にさらし、怪我を負わせたというのが、

理由だった。

たしかに、それは間違いではなかった。

奥野の方も逃げ出したリーダー格の少年たちを追跡したが、人数が多かったため、一般乗客を突き飛ばして逃げて行った。そのため、一般客の中に三人ほど、転んでかすり傷を負った者が出た。

奥野はその客たちへの対応を優先したため、全員が逃げおおせた。だが、明美が「確保」した少年が、駆けつけた交番の警察官に今までの余罪をぶちまけ、リーダーをはじめ、グループの全員が判明した。

警察としては、補導ほどうした段階で罰を受けているため、さらに学校で処分することは勧めなかったようだが、札付き連中だったらしく、学校はただちに停学処分を下したと聞いた。

今井ゆかりから事態を知らされた町村は、すぐさま上司の三木に事情を打ち明け、詫わびを入れた。

責任は自分にあるので、明美たちを処分しないでほしいというつもりだったのだろう。

しかし、三木から町村が詫わびを入れてきたと聞かされても、いや、町村がそう言うならなおさら、あくまで明美と奥野は、自分たちがコンビニにたまたまいただけであり、たまたま万引きを見つけてしまったので放置できず行動したということで貫つらぬき通した。

処分を言い渡した三木は、デスクに腰を下ろすと、しばし考え込んだあと、大きくため息をついて、直立不動の姿勢を崩さずにいた明美と奥野を見上げた。

「研修でくどいほど聞かされたと思うが、われわれは警察ではない。犯罪を取り締まるわけではないんだ。もつと言うなら、犯罪の発生を未然に防ぐのが任務だ」

「申し訳ありませんでした」

奥野が答えた。

三木が重々しくうなずいた。

「結果的には、逃げ出した連中を追跡しただけだ。手を出さなかったのは賢明だった」

それは奥野に向かって言ったように聞こえたが、明美にしても少年たちの態度いかんによつては手を出していたかもしれないと感じた。

自分たちが有名私立大学の付属高校に通っていることで、ほかの者に対する優越感を抱いているくらいならまだしも、だから何をやってもいいのだという考えには我慢がまんがならなかった。言い方を変えれば、よく奥野が我慢できたともいえる。

万引きが軽犯罪とはいえ、犯罪であることに変わりはない。

というより、法律で「犯罪」と決まっていなくても、「犯罪」に類するものはある。やるべきではない行為や発言というものがあ
る。それらを「犯罪」とみなさないで平然とおこなっている者は、
少なくともよいように思う。

さらには犯罪を犯しているという自覚はあっても、それが特別な
立場にいる自分には適用されないと考える者もいるし、自分の手を
汚さず、他人に「犯罪」をやらせておいて、そこで得た利益だけを
自分のものにしようとする者もいる。

「聞いているか」

三木の声が明美に向けられているのに気づき、姿勢を正した。

「今回は、たまたまコンビニできみたちは出くわし、たまたま万引
きを目撃した。その結果、こういうことになった。その主張をその
まま認めるよう、わたしも上長会議で通した。職務を離れて、何人
かの警備員が構内にある店の見回りをしているという噂も耳に入っ
たが、それを持ち出すと、今回のようなことが起きないよう規律を
厳密にしようと言いつけ出す者も出てくる」

三木はそこで言葉を切り、苦々しい表情になった。

「わたし個人の考えだが、そういう方向はよくないと思っている。
構内のコンビニで強盗が発生したのを確認したとしても、自分の職
務とは関係ないからといって知らんぷりをするような仕事のやり方

はどうかと思う。自分の職分は職分としてしっかりやるのは当然として、それだけやっていればいいというものでもない」

奥野と明美に、わかるだろうと言うような視線が向けられた。

「法は、法なきを理想とす。この言葉を知っているか」

奥野がうなずくのがわかったが、明美は初めて聞いた。

「人が生きていくために、法律はある。だが、法律で縛りあげていけば息苦しくなる。法律がなくても生活できることこそが、法律のあるべき姿だと、そういうような意味だ。もっとあっさり言えば、世の中は、決まりに従っていればそれで充分だとは限らない。そういう意味でもあるだろう。きみたちがたまたまコンビニで出くわすことも、必要だということだ」

小難しいことを言っているが、ようするに町村が今井ゆかりのいるコンビニを見回っている行為は、決して悪いことではないと言いたいのだと明美は理解した。

ふと父親が車内でトラブルになっていた二人の男に割って入った姿が頭をかすめた。運転士だから関係ないと知らないふりをすることもできたはずだが、父もまた自分の職分を離れてトラブルを解消したのだ。そんなことをしることもするなども内規には書かれていないだろう。ましてや法律にも。

「嚴重注意は、ここまでだ。明日からまた頑張ってほしい」

三木はそう言い、明美と奥野は一礼して解放された。

七

渋谷詰所のある事務室を出ると、そこに町村と今井、それに原口が待ち構えていた。

明美と奥野を認めた町村が、頭を深々と下げた。

「巻き込んでしまつて、悪かった。ごめんなさい」

今井ゆかりが隣で同じように頭を下げた。

「わたしのせいですみません」

原口はその二人を目にしつつ、明美と奥野に肩をすくめて見せた。

「そこまで気にすることないんじゃないのって言ったんだけどさ。

どうしても謝りたいって」

原口も事情は知っていたらしく、たまに今井ゆかりのコンビニを見張っていたことがあったらしい。自分も同じ立場だったという責
任感から一緒に顔を見せたようだ。

「べつに悪いことしたわけじゃないですし、三木さんもわかつてく
れているようです。はつきり口にはしなかったけれど、今後も見回

りは続けてほしいって思ってるみたいですし」

「へえ、そうなんだ。いかつい顔してるのに、話はわかるんだね」

明美の言葉に、原口は意外そうな声をあげた。

「統括官に事情を説明してくれたのはありがたかったです、処分は処分として受けます。少なくとも町村さんや今井さんが間違ったことをしたわけじゃないです。ですから、気にしないでください」

奥野が町村と今井に一步近づいてこたえた。

原口が両手を三度叩いた。

「はい、じゃこれで解決ね。さっそくエルニーニョに行って手打ち

の盃さかずきを交わすつてのは、どう」

「まだ昼過ぎですけど」

明美があきれて口になると、原口は顔をしかめた。

「昨日も集まるのかと思っただら、みんな来なかったじゃないの。だからその代わりにさ」

「行きましようか。ビールで乾杯ね」

奥野がそう言って先に立って歩き出した。

「そう来なくちゃ」

原口が続ぎ、今井も時間があるということ、五人は渋谷の街に出た。

「そういえば、原口さん、立ち直ったみたいですね」

並んで歩きながら町村に尋ねると、苦笑いが返ってきた。

「みたいよ。あれも一種の才能ってとこね」

なるほど。失敗をいつまでも引きずってはい前に進めない。切り替えることができるのも、たしかに才能だろう。

そう思っただけでなく、嚴重注意と減給処分を受けたのに、自分がそれほど落ち込んでいないのに気づいた。

「わたしも奥野さんも、落ち込んだりしてませんから」

唐突に今井と町村に言ったせいか、ふたりの顔に怪訝そうな色が浮かんだ。

「わかってきている人がいるって思うと、失敗しても頑張ろうって気になるし」

ふたりには何を言っているのかわからなかったかもしれない。ただ、明美は三木の存在が自分をそんな気にさせているのだというつもりで口にしたのだった。奥野もまた、同様に感じているに違いなかった。

強い陽射しがスクランブル交差点を照らし出している。

信号が青になって、五人は周囲にひしめいている者たちにまじって交差点を渡っていった。